

News Letter

Graduate School of Education



ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン教育研究所(UCL Institute of Education)における国際合同授業風景

巻頭言

南部 広孝 研究科長

2

名誉教授から

松下 佳代 名誉教授

3

研究ノート

[教員から] 田附 紘平 臨床心理学講座 准教授

[院生から] 作道 雄 修士課程1回生

[社会人院生から] 森本 悠 修士課程3回生

[留学生から] Khant Si Thu 修士課程2回生

4

活動報告

[附属臨床教育実践研究センターから]

松下 姫歌 附属臨床教育実践研究センター長

[教育実践コラボレーション・センターから]

明地 洋典 教育・人間科学講座 准教授

[グローバル教育展開オフィスから]

齊藤 智 グローバル教育展開オフィス・教育認知心理学講座 教授

6

事務室から

乾 浩典 事務長

7

トピックス

齋藤 直子 教育・人間科学講座 教授

8

若手研究者出版助成事業

9

諸記録

9

- ・ハラスメント防止に関する研修会
- ・主な出来事(2025.11.1～2026.3.31)
- ・教員寄贈図書リスト 2025(R7)年度
- ・入試結果 2026(R8)年度
- ・学位授与件数 2025(R7)年度
- ・教育職員免許状取得状況 2025(R7)年度
- ・外部資金受入れ(2025.10.1～2026.3.31)
- ・科学研究費補助金 2026(R8)年度
- ・人事異動(2025.11.1～2026.4.30)

諸報

15

- ・新任教員・事務職員紹介

教育学研究科・教育学部基金

16



京都大学 大学院教育学研究科ロゴマーク

このロゴマークは、京都大学学術情報メディアセンターの元客員教授・奥村昭夫先生のデザインです。奥村先生は、ロート製菓、グリコ、牛乳石鹸などのロゴマークやパッケージなどを手がけた著名グラフィックデザイナーです。本研究科・学部の「育ち」「つながり」「先端」といったキーコンセプトをもとに、教育学部本館の正面玄関を見守るクスノキの葉をモチーフとし、緑のグラデーションで成長の変化、中央の空間でこれから生まれてくるものを表わし、全体として両手で優しく包み込むイメージのデザインとなっています。

20年ほど前、生物学を専門とするH先生と二人で中国・東北地方の大学を訪れたことがある。そのとき、到着した空港から大学のある市内に向かう車の中で、H先生が車窓の風景を見ながら私に、「あの山に生えている樹は〇〇だから、ここは緯度がこれくらいの地域ですかね」とおっしゃった。「〇〇」としているのは、H先生が言われた固有名詞を私が覚えていないためである。山に様々な種類の樹木が生えていることも、その多くには固有の名称があることももちろん知っている。しかし、それ以上の知識を持たない私にとって、そこで目にしていたのはどれもただの「樹」であり、全体として樹々が生えている山が少し遠くに見える郊外の風景だった。私が興味を向けていたのはむしろ、建物や道端の看板、畑、それからそこで生活している人びとの様子だったと思う。H先生と私は、同じ風景を目にしながら、異なる世界を見ていたようである。

大学では多くの場合、学部や大学院での専門教育において何らかの専門分野について学ぶことになっていて、体系的な教育課程が提供されている。それぞれの専門分野には、その分野に特有の対象やものの見方があり、それらを適切に理解したり説明したりするために必要な、固有の知識やそれを表す専門用語がある。それぞれの専門分野で用いられる言葉は、専門用語はもちろん、一見専門用語とは見えないようなものも含めて、その意味内容を理解することで身につけることができるものの見方、さらには世界の認識のしかたと結びついている。このように考えると、ある専門分野を学ぶということは、たんに知識を学んでいるように思われる場合であっても、実はその分野で用いられる言葉を使って表現される世界の認識のしかたを身につける過程だと言える。

このことを、私はしばしば、「専門分野の眼鏡を掛ける」とか「自分の掛けている眼鏡を鍛える」と表現している。これは、自らが学んだ専門分野の「眼鏡」を通して見ることで、自分が見ようとしている対象、そして世

界をより鮮明に認識し、理解できるようになるというイメージである。研究者はそれぞれ、自らの専門分野の「眼鏡」を掛け、それに磨きをかけている。この比喩的な説明を用いれば、H先生と私は違う種類の「眼鏡」を掛けていたということになるだろう。

一方で、私たちは、そのような専門分野の「眼鏡」を掛けなくても、日常生活を含む様々な経験を通じて多くの知識や言葉、ものの見方を身につけていて、そういう「眼」を通して自分のいる世界を把握し理解している。そうした知識やものの見方の中には、家庭や地域社会などで過ごすうちにいつの間にか身につけたものもあるし、多様なメディアとの接触を通じて知らず知らず身につけているようなものもあるだろう。芸術作品に触れたり小説を読んだり、あるいは誰かと話をしたりすることで、突然視野が広がり世界の見え方が変わるようなこともあるかもしれない。また、学校教育は、多くの人を対象にして、一定程度共通の知識やものの見方を身につけさせる、つまり皆が同じような「眼」を持つように意図的に方向づける仕組みだと見ることもできる。

専門分野の「眼鏡」の掛け方が分かれば、自分の「眼」で見ているものが「眼鏡」を通したものととは違うことを意識でき、自分のものの見方を捉え直すことにつながるかもしれない。また、他の専門分野に触れることで、自分が掛けているのとは異なる種類の「眼鏡」があることや、自分の「眼鏡」に改良の余地があることに気づくかもしれない。大学で学ぶ意義(の一つ)は、このような自分の「眼鏡」を持つことではないだろうか。



退職を迎えて ―未熟であり続けること―

松下 佳代

私は1979年、共通一次試験第1期生として、教育学部に入りました。当時は定員50名に対し女子11名。同期には、後に推理小説家になった内田直行さん（ペンネーム綾辻行人）、日本学術会議第一部部長を務めたロシア史研究者の橋本伸也さんらがいました。1985年に学生運動の内部抗争で亡くなった福島慎一郎さんも、同郷のクラスメイトでした。

当時の学生たちは、高野悦子『二十歳の原点』（1971）を必読書のように読んでいました。「独りであること、未熟であること、これが私の二十歳の原点である」。高野悦子が二十歳の成人の日に日記に記したこの一文。同級生たちは自分より大人びて見え、心を割って話ができる友だちもまだいない。受験勉強だけやってきて社会のことを何も知らない。「独りであること、未熟であること」――ああ、これは私のことだ、と思いました。

その後、稲葉宏雄教授、天野正輝助教授のおられた教育課程講座（今の教育方法学コース）に進み、仲間もでき、研究の面白さも知りましたが、進路には悩みました。当時は、女性教員・研究者が圧倒的に少なく、男性でもオーバードクター（OD）問題が深刻ななかで、女性が大学にポストを得るのはほぼ絶望的に思えたからです。助手でいらした田中耕治先生が勧めてくださらなかったら、大学院には進学していなかったと思います。何とか修士課程・博士後期課程に進学しましたが、やはり就職には苦労しました。7年間のOD生活を経てようやく、1995年に教育学部の助手となり、その後、群馬大学教育学部での5年間を挟んで、2002年に高等教育教授システム開発センター助教授として京大に戻りました。それまでは初等・中等教育をフィールドにしていたのですが、センター着任後は大学教育も

フィールドに加わり、以降、二足のわらじで研究活動を進めてきました。

私の研究テーマは、能力・学習・評価です。教育研究において初等・中等教育と大学教育は分断されているの

ですが、この両方を見通すことができるのが自分の強みだと思っています。私が研究においてモットーにしているのは、概念と方法をつなぐこと。輸入した概念ではなく、自分で概念を創ること、そして、概念だけでなく、それに対応する教育（学習）方法を創ることです。具体的には、「ディープ・アクティブラーニング」「対話型論証」「PEPA（重要科目に埋め込まれたパフォーマンス評価）」といった概念と方法を現場の先生方とともに創ってきました。

コロナ禍でのオンライン授業の支援などで、高等教育研究開発推進センターの活動がようやく学内でも知られるようになったと思っていた矢先、2021年11月に突然、センター廃止の意向を大学執行部から告げられました。抵抗しましたが廃止が決定され、一時は、希望した教育学研究科への転籍を認められず、高等教育学コースの存続も危ういという状況でしたが、教育学研究科の先生方の働きかけ、コースの院生・修了生の嘆願が実を結び、何とか2022年10月に教育学研究科に異動することができました。以来、3年半は教育方法学コースと高等教育学コースの両方の学生・院生を指導する機会に恵まれ、また内閣府の大きなプロジェクトにも研究開発責任者として取り組むことができました。

この4月からは、京都芸術大学に移り、新設された学習支援・教育開発センターの長を務めています。今日まで、多くの人に支えられながら（ときには私も支えながら）、生きてきました。今はもう「独りである」とは思いません。でも、「未熟ではあり続けたい」とと思っています。未熟さは、新しい世界を切り拓こうとするときに感じるものだからです。

「独りではない。けれど、未熟ではあり続けたい」。これが私の65歳の原点です。



教員から

わからないことでも、わかろうとすること



臨床心理学講座
准教授

田附 紘平

私は、学部生の頃、「人の心を知りたい」と思って心理学を専攻することにした。とくに心理的な悩みを抱えるクライアントをどのように理解し、彼らにどのように関わるかに関する学問である臨床心理学に惹かれ、大学院に進学した。それから現在まで、臨床心理学をもとにした実践と研究を続けてきた。

最近、ふと「人の心を知ることができたのか」と自問することがあ

った。思い浮かんできた答えは「No」であった。たしかに知識は増えた。初心のときよりも、クライアントがどんな人かを考える枠組みを多くもっていると思う。しかし、目の前の人が、何を考えていて、どのような気持ちでいるか、そして、それはどうしてなのか、必死に想像してもわからないことが多い。経験を積むにつれて、ますますわからないと感じることが増えた気

がする。私の精進が足りないと思う。

臨床心理学に根差した実践である心理療法の場に身をおいていると、クライアントの変化を実感することがある。その裏側に、無理しているのではないかと思うほどの懸命な努力も同時に感じる。クライアントあるいは心理療法の場において、新たなものが生みだされるとはどういうことか、それを支えるにはどうしたらよいか。こうした曖昧な問いに対する答えに少しでも近づくために研究を行ってきた。いや、その時々に関心にしたがって研究していたら、一つ一つの探究がこうした問いに収斂されてきたという方が正しいようにも思う。

結局、人の心を知ることとはできるのだろうか。そもそも、人の心とはどのようなもので、その全体像を知るにはどうすればよいかということも私には謎である。しかし、「わからないことでも、わかろうとすること」によって新しい道が開ける可能性があることをこれまでに学んだ。探究をあきらめずに続けた先に、人の心に対してどのような思いを抱くのか、自分に対して少しだけ楽しみにしている。

院生から

学び直しの勇気



臨床教育学コース
修士課程1回生

作道 雄

私たちは、どのように生きるべきだろうか。これは、誰もが無言で問われ続けている、避けて通ることのできない問いであろう。私が所属する臨床教育学コースでは、「生き方としての哲学」という指導教員の言葉を軸に、このテーマを自らの問いとして引き受けることを目指している。院生たちは哲学者や思想家の文献と対話をしながら、それを具体的な教育や

社会の問題につなげる研究を

各々行っている。その研究のフィールドは、学校、社会施設、国際交流から映画にいたるまで多様であり、学際的であることが本コースの特徴の一つだ。

普段、私は映画監督・脚本家として活動している。昨年、映画の公開キャンペーンを通してアメリカ哲学の本に出会った。そこに、人間の生の曖昧さに踏み入る自分の思考との親和性を

感じ、創作活動と研究を並行させることを決めた。

分かりやすい言葉（「正解」）に漕ぎ着き、早く人生を楽しみたいと思う程には情報が溢れ返るこの時代に、言葉にならない曖昧さを希求し続けるような生き方とはどういうものだろうか。この問いへの一つの応答として、映画鑑賞や読書体験がヒントになるのではないかと考えている。そしてこれに示唆を与えてくれる、エマソンの道徳的完成主義の研究を私は行っている。映画や読書に教養や流行を求めるのではなく、人間の持つ曖昧さ（言葉や表情も含め）に目を向け、それをどのように感受していくのかに焦点を当てるような研究スタイルを開拓していきたい。

東京と京都の二拠点生活のため、京都に一室借りた。大学は京大法学部だったので、幸い京都の生活には慣れている。講義の合間に鴨川を歩いてみると、十数年前に落としてしまっていた時計を拾い上げたような気になった。針は、静かに動いている。頬を撫でる風の心地よさは十代の頃と変わらない。私は、どのように生きるべきだろうか。この問いに出会えたと思えることが、学び直しの勇気を私に与えてくれる。

社会人院生から

働きやすさの本質を問う ―多様だから見えること―



教育学専修高等教育学コース
修士課程3回生

森本 悠

新緑の季節、吉田キャンパスに生い茂る青々とした木々と、ずっと通り抜ける風がお気に入りです。大学院での日々は、当たり前を疑い、言葉にし、効率やタイパを脇において違和感に向き合える、自由で風通しのよい満ち足りた時間です。

大学職員として人事労務の仕事をし、2人の息子を育てる中で感じた疑問を出発点に、働きながら長期履修で進学しました。現在、

佐藤先生の前では、自分の言葉で語れているか、どこまで理解できているか、すべてお見通しです。その中で違和感が少しずつ輪郭を持ち、物事の見え方が変わっていく面白さを感じています。

授業や研究を通して、大学職員としての実務経験を高等教育や教育という広い視野で捉え直す中で、個人の努力だけでは語りきれない社会構造や文化との関係に気づき直す経験をしています。

DEIや女性活躍推進が数値目標として設定される社会の中、私は数値の達成にとどまらず、学生・教員・職員と大学の中にいる人々が「生きやすくなった」という実感を伴う変化も大切にしたいと考えています。「多様な人がいるから、一律に対応ができない」と多様さを諦めの理由に使うのではなく、多様な他者の視点を知ることが、前に進める一歩にきつとなるはず。新緑の木々を通り抜ける風のように軽やかに、研究と実践の場での変化を繋げていきたいです。知と対話の場を与えてくださる先生方、院生の皆さん、実践に共に向きあう職場の皆さん、ありがとうございます。

留学生から

知性の悪い使い方



教育認知心理学コース
修士課程2回生

Khant Si Thu

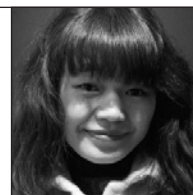
私の今の研究の関心は高校生の時から始まりました。その時は今のように「これを研究したい」と感じたわけではありませんが、ただ何かに違和感を感じました。その何かをはじめに感じたのはディベートチームのような部活に入った時です。活動の目的は部員たちの議論能力・ディベートスキルを高めることであって、他の高校の部活の部員たちとも色々な議論の活動をしました。当時、よく聞いた表現・言葉は「上手い議論者はどの立場からでも勝てる・勝つべきだ」のようなものです。要するに何のトピックに賛成する側であっても、反対する側であっても頭がいい人の方が勝つという考え方です。この考え方は当たり前なものと認められており、大人の世界でもその考え方に賛成する方もいるでしょう。ただ、私は大学生になっ

て卒論を書く時、今後自分は何を研究したいかを考えたところ、あの時の違和感を思い出しました。改めて考えてみるとその「頭がいい＝どの立場であっても勝つ」というのはおかしいと思いました。もし「Aはいい」が正しければ、「Aは悪い」は間違っているはずですが、「上手い議論者はどの立場からでも勝てる・勝つべきだ」の考え方だとその頭がいい人は「Aはいい」であっても「Aは悪い」であっても、議論すれば勝つのです。つまり、「頭がいい・議論スキルが高い」人たちは知性や理性を使って「真実を探す・証明する」より、どんな知的な手段を使っても「勝つ」ことを優先している、目的としているということになります。私はこれは非常に危ないことだと感じました。自分もしてきたこと、今でもたまには気づかずにそうしてしまうことがあるかもしれないけれど、そのような思考の態度を減らしたいと思っています。なぜこのような思考(Myside Bias)が生じるのか、どうやって減らせるのかを検討するのが今の私の研究です。

附属臨床教育実践研究センターから

臨床教育実践研究センターの活動

附属臨床教育実践研究センター長
松下 姫歌



附属臨床教育実践研究センターは、心理教育相談室の活動を基盤に、現代の心理社会的問題にアプローチすべく、実践および教育研究を推進しています。当センターでは国際的に第一線で活躍されている研究者を、外国人客員教授として招聘しています。この春には、台湾の精神科医でユング派心理療法師の鄧惠文（タン・フィウウェン）先生をお迎えしています。

鄧先生には、3月に一般市民に向けて開催した公開講座にて“Better Date with AI? : A Jungian Reflection on Relationships in the Digital Era.”という演題でご講演頂きました。まさに現代的なテーマであり、例年以上に広く多様な層の皆様を受講を頂きました。

アンケートでは参加者の9割以上に満足とのご回答を頂き、たいへん好評を得ました。「AIに相談したらこう言われた」といった話を聞くことも増え、気になっていたテーマだったので、興味深く面白かった」「もやもやとしたAI時代の難問について言語化してもらえた」「ポストヒューマン時代の人間性について、本質的な意味を考えるよい機会となった。ヒューマンパー

トナーにオールインワンな役割を求めすぎる過剰期待な人間社会が、少子化問題や未婚率の根本的な要因と思った」「人間が不完全であるからこそ素晴らしく、そのために苦しみ努力することが美しく、それを感じ取れる余裕をもてる社会になることが最重要課題であることを再認識した」等、多くの貴重な感想が寄せられました。

また秋には、京都学派や日本文化にも造詣の深い、精神分析家のルディ・ペルモート先生をお迎えする予定です。公開講座は11月に開催すべく調整中ですが、今から楽しみです。

そのほか、例年夏季に開催しているリカレント教育講座の日程が、7月26日に決定しました。今年は「家族」をテーマに、午前の部はシンポジウム、午後の部は分科会形式にて、全国の教育現場における多様な心の問題に関する事例研究を行います。毎年全国から多くのご参加を頂き、「明日からまた頑張ろう」と思える視点や活力をもらえる」と大変好評を得ております。教育学研究科HPでも案内いたしますので、ぜひ御参加頂ければ幸いです。

教育実践コラボレーション・センターから

知の創発を支える自由と対話の場

教育・人間科学講座 准教授
明地 洋典

「自由の学風の『自由』とは具体的にどういう意味ですか？」

6年半前、教員選考面接で何か質問はないか聞かれ、こう質問しました。選考委員の1人が「その意味はそれぞれで異なります」と答えてくださいました。「自由」の解釈も各自に委ねられており、自由であるということだと思います。

学問において最初にかつ最後まで保証されるべきものは問う自由と哲学の自由です。既存の前提や理論を疑う自由、独自の視点から自身の論理と考えを表明する自由がなければ、知は創発しません。

暗黙となっている前提や視点は、異なる前提や視点を持った者同士の対話を通して意識化されます。対話は「いまここ」で行われるものだけでなく、文献を通した書き手との対話、大規模言語モデルを通した共有知との対話、便所の落書きたちを通した歴史や時代との対話も含みます。他種との非言語的な対話もあります。

考えを進めてみると、学問において自由と対話は対になることでしかそれぞれ意味をなさない気がしてきます。自由なき対話は予定調和にしかならず、対話なき自由は個人の思考の枠を超えられません。

当センターの裏あるいは真の目的は、本研究科において自由と対話を促進して知が創発する場を保証することにあるのではないかと考えています。そして、研究科に閉じてはその責任は果たし切れません。

本稿ではもともと写真にある「発達障害と教育に関する連続研究会」の報告や紹介を行う予定でした。各部署に散在する神経発達症に関わる研究者、実践家が自由に対話を行うことで自然にネットワークが形成される場となるとよいと考えています。

分野横断、文理融合、総合知、共創などの旗印の下、研究者は半ば強制的に混ぜ合わせられがちですが、有機的な知の創発や統合は自由と対話から生じます。そして、自由と対話に基づく関係は必ずしも和にならずともよく、個を尊重しつつ、廻り続ける環として機能すればそれでよいはずです。

当センターが知の創発を支える自由と対話の場となるよう、意識して活動をしたいと思います。



発達障害と教育に関する連続研究会 第1回

グローバル教育展開オフィスから

オフィス長からのご挨拶

グローバル教育展開オフィス・教育認知心理学講座 教授
齊藤 智

宇宙ステーションから撮影され、NASAが提供するこの写真は、日本が、地球(the globe)の一部であることをいつも思い出させてくれます。2026年4月からオフィス長を務めることとなり、あらためてこの写真を見ると、グローバル教育展開オフィスとは、地球規模教育展開オフィスということなのか、などと訳のわからない考えが頭に浮かんできます。以前から、グローバル教育展開オフィスが、グローバル教育を展開するオフィスなのか、グローバルに教育を展開するオフィスなのか、どちらなのだろうと疑問に感じていましたが、オフィス長となっても、今ひとつその理解は判然といたしません。宇宙から地球を眺めていると、どちらでもいいかあという気持ちにもなります。そういえば英語ではGlobal Education Officeと名乗って



A night earth observation photo from NASA Image Libraries

いますから、実は「展開」は不要なのですね。要は、オフィスのキーワードは「グローバル」と「教育」ということなのでしょう。

さて、今、多くの

人が国境を意識しておられるのかもしれませんが。少なくとも私自身は、これほどまでに国境 - 地球全体に物理的にも仮想的にも張り巡らされた広大な線状のネットワーク(Crawford, 2022) - を強く意識したことはありません。この人工的な境界を越えて、誰もが自由に行き来できるわけではないということ、です。ここで、「グローバル」ということの意味を考えさせられます。「国際的(international)」とは異なり、「グローバル」は、国境の存在を必ずしも前提とせず、地球全体を1つのものとして扱う概念であると私は理解しています。今だからこそ、「グローバル」の原点に立ち返り、教育研究と教育実践を「展開」していくことを目指したいと思います。

4月に岩渕和祥講師が着任し、グローバル教育展開オフィスは数年ぶりにフルメンバー体制となりました。皆で力を合わせ、地球規模教育展開?に挑みます。ご支援をお願い申し上げます。

Crawford, J. (2022) *The edge of the plain: How borders make and break our world*. Canongate Books (クロフォード J. 東郷えりか (訳) (2024) 国境と人類: 文明誕生以来の難問 河出書房新社)

➤ 事務室から

年齢とともに変化?

事務長
乾 浩典

昨年の10月に教育学研究科に着任し6か月以上が経過しますが、私自身のことを研究科の皆さんにお話しする機会はあまりございませんので、この記事をつうじて私の一面を知っていただければと思い、自分像について書かせていただきます。

まず、50代半ばを迎え、まだまだ年齢を気にする歳ではないと思っていたのですが、これは勘違いで、特に無理をした覚えもないのにある日突然腰痛になったかと思うと、次は肩が痛くなるのが最近増えました。特に、腰は痛みがひどい時期がありましたので、近所の整体院に行き痛みを和らげるストレッチ等を教えてもらい、寝る前にこれをやり始めてからは痛みの頻度が減り、最近は快適に過ごしています。

一方、週末の過ごし方といえば、趣味のゴルフ(もっぱら練習)とスーパー銭湯でのんびり過ごすことが最近のトレンドです。オジサン街道まっしぐらといったところでしょうか。とはいっても、昔からこのような生活をしていたのではなく、以前は週末になればテニスにスノーボード、マラソン、遡れば大学時代は

ラクロスにのめり込んでいた時期もあり、身体を活発に動かすのが好きで、興味を持てばまずは始めてみるタイプでした。

さて、このような趣味歴ではありますが、最近は新たな趣味を始めるような機会もなく(最大の要因は子供2人の習い事に週末同行する機会が増え、時間的余裕がなくなったからだと思いますが...)、かといって以前やっていたスポーツを復活してみる気にもならず、気が付くと先のとおりで、趣味は「動」から「静」に変化していました。個人的には年齢相応に趣味が変わるのも悪くないと思いつつも、このままでいいのか悩むところ、です。

以上のように、週末も含めた私の姿はこのとおりですが、平日の業務では「動」を意識し、新たなことにも積極的に取り組んでまいりたいと考えております。引き続き、教育学研究科のお役に立てるよう頑張りますので、どうぞよろしくお願い致します。

京都大学大学院教育学研究科と ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン教育研究所(UCL Institute of Education)との 国際合同授業

教育・人間科学講座 教授
齋藤 直子

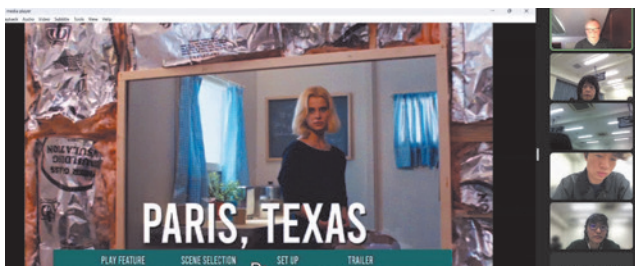
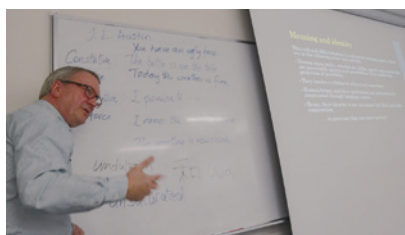
京都大学大学院教育学研究科とユニバーシティ・カレッジ・ロンドン教育研究所(UCL Institute of Education)は、2014年から共同授業を行ってきました。コロナ禍の2020年度以降は、本授業をオンライン(ハイブリッド)で開講しています。UCL教育研究所と京都大学の多くの学部生、大学院生が参加し、両機関の国際交流に携わり、またこれを通じて京都大学の学生たちの国際学会の発表や英語論文の出版が促進されてきました。2017年以降は、京都大学とUCL教育研究所の国際交流の一環として、グローバル教育展開オフィスの支援を受けています。UCL 教育研究所の教育哲学部門長でありイギリス教育哲学会会長であられるポール・スタンディッシュ(Paul Standish)教授は、12年以上にわたり、この授業を先導して下さり、京都大学の学生たちの英語力や思考力の育成、そして何よりも国や文化、言語、専門分野の境界を超えて自己を他者に開くことを教えて下さっています。

2014年度以降、今日にいたるまでは“Thinking Education through film”と題する連続授業を行ってきました。毎年、授業のテーマごとに日本や韓国を含むアジアの映画と欧米の映画を組み合わせ、それと哲学的テキストの読解を交差させる形で、生きることの意味、教育のあり方、自己と他者の関係、言葉との関わり直しとしての翻訳などのテーマを議論しています。2025年度は、“Philosophy as a Way of Life”という主題のもとで、『ワンダフルライフ』(1999)(是枝裕和監督)および『The Tree of Life』(2011)(Directed by Terrence Malick)を視聴し、「生き方としての哲学」のあり方を探究しました。いずれの授業も、映画の視聴を、プラトン等の古典、ハイデガーやレヴィナス、ドゥルーズ、デリダ、リオタル等のヨーロッパ大陸哲学、ウィットゲンシュタインの言語哲学、ソロー、エマソンのアメリカ超越主義に加えて、カベル(Stanley Cavell)、ヌสบaum(Martha C. Nussbaum)、クッツェー(John M. Coetzee)、ホネット(Axel Honneth)、ムフ(Chantal Mouffe)、ブルーム(Allan Bloom)、アド(Pierre Hadot)などの現代哲学者の難解なテキストの読解と組み合わせる形で行われています。

授業では、たんに映画について評するのではなく、映画の具体的な場面の分析、カメラのアングル、登場人物の表情や言葉などに着目しながら、映画を生きたフィールドとして蘇らせます。また、映画の解釈についても、作り手の意図や作品の内容・構成を固定して、その意味を正確に読み取るということではなく、終わりのない解釈に開かれたテキストとして、それとの対話を通じて、観る者が

自らの声を発見していきます。それはたんに恣意的な解釈ではなく、テキストや他者との対話を通じて、自らの思想と言葉を研ぎますことで、自らの解釈の妥当性を試し改定していくプロセスです。緻密に読解する哲学のテキストの言葉を映画の世界と交流させることで、解釈の広がりや深みは増してゆきます。この意味で、本国際合同授業は、外国語としての英語で授業をするということを超えて、言語との関わり直しを通じて、自己、他者、言葉を翻し続ける「翻訳としての哲学」の実践の場となっています。

スタンディッシュ教授の英語でのご講義、UCL教育研究所の大学院生たちとのグループディスカッション、全体ディスカッションを通じて、京都大学の学生たちは、異言語で自らの思想や感情を表現せざるをえなくなります。ヨーロッパのみならず世界の教育研究機関のハブとしてのUCL教育研究所側は、イギリス人のみならず、韓国、中国などアジア諸国や、ブラジル、シリア、フィリピン、エチオピア・インド、ポーランド、アイルランド、キプロス、オーストラリア、パキスタンなど、世界各国からの研究者や留学生が参加し、まさにグローバルな対話の場が形成されます。また参加者の研究分野も教育を軸に学際的な広がりを持ち、哲学、心理学、社会学、法学、政治学、文学など学際的な知見の交流の場が生み出されます。また、こうした対話の場は、欧米の大学院ゼミの雰囲気を実現するもので、京都大学の学生たちが、留学をしたり、国際学会で発表をするためのトレーニングの機会ともなります。さらに授業はその場で終わるのではなく、京都大学の学生が、英語で執筆した最終レポートを、UCL教育研究所の教員や大学院生の指導を受けて論文にし、紀要や報告書に出版するということを行ってきました。このことは、同教育研究所やその他の欧米の大学院への中短期の留学、国際学会での発表、国内外の査読付き英語論文の出版にもつながってきました。また学部3年生、4年生も参加することで、大学院進学へのきっかけもつくってきました。外国語で自らの言葉を発見しそれを他者に伝え、他者からの言葉を受けて再度それを作り直すという「翻訳としての哲学」実践は、たんなるコミュニケーションのスキルを超えて、生きること、思考すること、他者と共に生きることと不可分な高度な語学力の育成に寄与しています。国際合同授業はこうして、「生き方としての哲学」の実践の場であり、他者と共に自らの生を完成し続ける終わりのない完成の修練の場となっています。



若手研究者出版助成事業

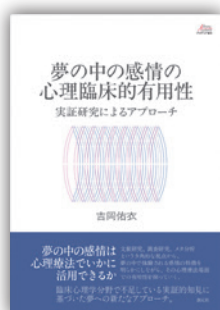
教育学研究科では、京都大学人と社会の未来研究院若手出版助成を受け、優秀な若手研究者による博士論文の出版助成事業を行っております。本制度を利用して昨年度は2件採択されましたので、ご紹介します。



風景構成法の彩色過程における心理療法としての意義 —理論的・実証的研究からみた描き手と見守り手の心的交流— 【創元社】

清重 英矩 京都大学大学院教育学研究科臨床教育学専攻博士後期課程(2023.5)/東洋英和女学院大学人間社会学部・講師(任期制嘱託講師)

本書は、精神科医の中井久夫によって創案された風景構成法について、これまで中心的に扱われることの少なかった「彩色過程」に着目し、その心理療法としての意義を論じたものである。描き手と見守り手の関係に焦点を当て、風景構成法の彩色過程における描き手の描画体験に、その関係がどのように関連しているのか、また、色を塗ることがどのような心理療法としての機能を持ち得るかについて、理論的・実証的に検討を行っている。風景構成法を描き手とともにするその場において、彩色過程での心的な交流に開かれる可能性を提示することを通して、風景構成法に固有の心理臨床学的な価値を探り、現代社会における心理臨床の意義をその本質から問い直すことを試みている。



夢の中の感情の心理臨床的有用性 実証研究によるアプローチ 【創元社】

吉岡 佑衣 京都大学大学院教育学研究科博士後期課程修了(2025.3)/関西学院大学文学研究科・博士研究員

私たちは睡眠中に見る夢の中で、現実と同じように多様かつ強い感情を体験する。しかし、その感情はどのような意味を持ち、心理療法においてどのように活かされうるのだろうか？本書はこの問いに応えるべく、夢の中で生起する感情に焦点を当て、その心理学的・臨床的意義を実証的に明らかにする試みである。先行研究や理論の整理に加え、質問紙調査、夢日記法、心理療法事例のメタ分析といった多角的手法を用い、夢と覚醒時の感情との連続性や意識されにくい感情の表出としての補償機能を検討する。さらに、年齢や文化的背景による差異にも目を向け、夢の感情が持つ多層的な特徴を描き出す。夢という身近でありながら未解明な現象を手がかりに人間の感情と心の働きを読み解き、心理療法への新たな視座を提示する一冊である。

諸記録

ハラスメント防止に関する研修会

本研究科・学部では、教職員及び学生等の人権、特にハラスメントの認識をより深め、「ひと」としての人格や尊厳を高めハラスメントの防止を図ること、さらに就労上又は修学上の適正な環境を築くため、研修会を開催しています。

2026年度は、2026年5月21日(木)に開催し、京都大学学生総合支援学生相談部門の中川純子先生による講演が第1会議室であり、教員、事務職員の33名の参加を得て、意識を高める機会となりました。



主な出来事 (2025.11.1~2026.3.31)

2025年11月1日(土)～ 2日(日)	教育実践コラボレーション・センター&グローバル教育展開オフィス 北京師範大学教育学部との大学院生学術交流会 「Balancing Equity and Quality in Education: Policies and Practices for Diverse Needs」 南部 広孝 教授・張 潔麗 助教・大学院学生 北京師範大学
12月5日(金)	高大連携事業 高校生向け特別事業「図書館の歴史と多様性」 福井 佑介 准教授 京都大学総合研究2号館
12月20日(土)	高大連携事業 「高大連携フォーラム in 京都大学」 西岡 加名恵 教授 京都大学人間・環境学研究科棟
2026年1月20日(火)	グローバル教育展開オフィス 世界市民プロジェクト 立命館大学国際平和ミュージアム訪問・君島東彦特命教授による講演会 「平和教育を再構築するー関係性としての平和」 広瀬 悠三 准教授 立命館大学国際平和ミュージアム
1月29日(木)	自主講座「認識台湾 RenshiTaiwan」 台湾映画『一八九五』上映会&アフタートーク 駒込 武 教授 京都大学人間・環境学研究科棟
2月10日(火)	教育実践コラボレーション・センター E.FORUM QTAL開設記念オンライン・セミナー 「次期学習指導要領の方向性とパフォーマンス評価の意味」 松下 佳代 教授、石井 英真 准教授、奥村 好美 准教授 オンライン
2月20日(金)	教育実践コラボレーション・センター E.FORUM 『高等学校 探究的な学び実践事例集』出版記念企画オンライン・セミナー 「探究的な学びの多様なアプローチに学ぶ」 松下 佳代 教授、石井 英真 准教授、岡村 亮佑 氏(長野大学)、市橋 千弥 氏(大学院生)、 田淵 知紗 氏(大学院生)、サチニ ウダワッタ 氏(大学院生)、肖 瑶 氏(千里金蘭大学)、 石田 智敬 氏(愛知県立芸術大学) オンライン
2月27日(金)	グローバル教育展開オフィス 世界市民プロジェクト 大学院生による研究報告会 パク・ジュナ 講師 京都大学清風荘
3月7日(土)	教育実践コラボレーション・センター E.FORUM 第5回公開シンポジウム「不登校現象と今後の学校づくり」 (主催：日本学術会議 心理学・教育学委員会 不登校現象と学校づくり分科会 共催：E.FORUM) 西岡 加名恵 教授、浜田 博文 氏(筑波大学) ほか オンライン
3月11日(水)～12日(木)	グローバル教育展開オフィス ドルトムント工科大学教育・心理学部との研究ワークショップ 「Experiencing and Representing the World: Education in Anthropocene (世界を経験し、表象する：人新世における教育)」 広瀬 悠三 准教授 他 京都大学百周年時計台記念館

3月15日(日)	教育学研究科附属臨床教育実践研究センター主催 公開講座 「AIとデートする？-デジタル時代の人間関係についてのユング心理学的考察-」 村上 千理 特定助教 キャンパスプラザ京都
3月20日(金)	教育実践コラボレーション・センター E.FORUM 第6回「『生きる』教育」研修会 別所 美佐子 氏(大阪市立田島南小学校)、田中 梓 氏(大阪市立田島中学校)、 紙原 大輔 氏(大阪市立田島中学校)、檜崎 祐也 氏(大阪市立田島中学校)、 竹内 和雄 氏(兵庫県立大学) 総合研究8号館 NSホール
3月22日(日)	教育実践コラボレーション・センター E.FORUM 2025全国スクールリーダー育成研修「第21回実践交流会」 石井 英真 准教授、奥村 好美 准教授 総合研究2号館
3月22日(日)	教育実践コラボレーション・センター E.FORUM パネルディスカッション「探究の軌跡を可視化する」(SIP AICAN) 松下 佳代 教授、石井 英真 准教授、石田 智敬 氏(愛知県立芸術大学)、久富 望 氏(花園大学)、 田中 孝平 氏(北海道大学)、ほか 益川ホール

教員寄贈図書 2025(令和7)年度

寄贈者氏名	寄贈図書名	出版社	出版年
清重 英矩	風景構成法の彩色過程における心理療法としての意義： 理論的・実証的研究からみた描き手と見守り手の心的交流	創元社	2026
佐野 真由子	歴史のなかの外交儀礼	績文堂出版	2025
佐野 真由子	幕末維新史への招待：国際関係編	山川出版社	2025
佐野 真由子	万博学／Expo-logy第4号： 特集万博学で考える二〇二五年大阪・関西万博	思文閣出版	2025
高谷 掌子	教師と学生が知っておくべき教育原理	北樹出版	2024
高谷 掌子	越境する知としての西田哲学	京都大学学術出版会	2025
田中 智子	有賀鐵太郎：大いなる学究の軌跡	京都大学学術出版会	2025
田中 智子	占領期日本の教育再建と越境キリスト教	教文館	2026
張 潔麗	中国高等職業教育の展開：その制度的・教育的・文化的要因から	東信堂	2024
張 潔麗	学士課程段階の高等職業教育の社会的受容状況に関する実証的研究： 中国を事例にして（中間報告書）	張 潔麗	2025
西岡 加名恵	子どもたちの「今」を輝かせる学校づくり： トラウマ・インフォームド・エデュケーション	日本標準	2024
西岡 加名恵	「『生きる』教育」で変わる未来：学校を子どもたちの「心の安全基地」に	日本標準	2025
松下 佳代	ライティング教育の可能性：アカデミックとパーソナルを架橋する	勁草書房	2025

受入期間：2025/4/1～2026/3/31 寄贈者氏名順(敬称略)
教育学研究科・教育学部図書室にいただいた寄贈者の著作・分担執筆・翻訳・監修・監訳のみ掲載です。
今後とも蔵書充実のためにご寄贈くださいますようお願いいたします。

入試結果 2026(令和8)年度

教育学部

日程等		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
一般選抜入試 前期日程	文系	46	169	162	47	56
	理系	10	38	34	11	
特色入試		6	22	22	3	3
学士入学(第3年次編入学)		10	16	16	4	4

※前期日程の募集人員は、特色入試において最終的な入学手続者数が募集人員に満たない場合には、残余の募集人員を加えます。

教育学研究科

課程等			募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
教育学環専攻	修士課程	研究者養成プログラム	37	74(11)	71(11)	40(5)	39(5)
		アカデミック・リカレント教育プログラム	5	15	15	4	4
	博士後期課程	研究者養成プログラム	若干名	10(1)	10(1)	0(0)	0(0)
		臨床実践指導者養成プログラム	4	5	5	2	2

※博士後期課程(研究者養成プログラム)は内部進学者を除いた数。

()内の数は外国人留学生で内数

学位授与件数 2025(令和7)年度

学位名等		授与者数
修士	教育科学科	68
修士	教育学環専攻	40
博士	課程博士	8
	論文博士	2

教育職員免許状取得状況 2025(令和7)年度

中学校教諭専修免許状	0
中学校教諭1種免許状	2
高等学校教諭専修免許状	0
高等学校教諭1種免許状	5
特別支援学校教諭1種免許状	0

外部資金受入れ(2025.10.1~2026.3.31)

受託研究

研究題目	委託者	研究担当者
教育コンテンツ・評価手法と探究指導力育成研修の開発	国立研究開発法人 科学技術振興機構	松下 佳代

科学研究費補助金 2026(令和8)年度

年度当初判明分まで

事業名	研究課題名	氏名
基盤研究(A)	すべての学習者に対応した深い学びと創造性の実現：包摂的アクティブ・ラーニング開発	Manalo Emmanuel
基盤研究(A)	共助コミュニティを活かした多世代ウェルビーイング支援モデルの構築	明和 政子
基盤研究(B)	若年者の犯罪・非行からの離脱プロセス：デジスタンスを促す／妨げる社会的要因の探求	岡邊 健
基盤研究(B)	環境感受性の考え方にに基づく心理的健康に関する遺伝・環境交互作用モデルの多角的検証	高橋 雄介
基盤研究(B)	コンピテンシーの形成・評価の検討ー統合性・分野固有性・エージェンシーに着目してー	松下 佳代
基盤研究(B)	子どもの多様なニーズに対応するパフォーマンス評価を活かしたカリキュラム改善	西岡 加名恵
基盤研究(B)	概念ベースのカリキュラムを通じた日本型学校教育の再構築	石井 英真
基盤研究(B)	臨床的見立て熟達モデルに基づくAIカウンセリング対話の評価と設計および教育的応用	畑中 千紘
基盤研究(B)	「中年文化」の戦後メディア史に関する歴史社会学的研究	福岡 良明
基盤研究(B)	幼児の満足遅延は何に由来し何を予測するのか：縦断コホート研究	齊藤 智
基盤研究(C)	東アジアにおける文化差の調査：日本人と韓国人の心理的メカニズムの比較研究	Park Joonha
基盤研究(C)	〈働きつつ学ぶ〉の戦後史ー京都人文学園・京都勤労者学園を中心にー	奥村 旅人
基盤研究(C)	オランダのオルタナティブ教育の特質と質保証	奥村 好美
基盤研究(C)	教育的関係における信頼の理論と実践に関する研究	広瀬 悠三
基盤研究(C)	行為の概念性から迫る実践知の特質：「実践のなかの省察」とはいかなることか	三澤 紘一郎
基盤研究(C)	本邦におけるスーパーヴィジョンの成り立ちー精神分析史からのアプローチー	西 見奈子
基盤研究(C)	コミュニティの図書館を目指すソーシャル・ライブラリー：歴史像の再生と再構築	川崎 良孝
基盤研究(C)	戦前都市新中間層における「市民像」の生成：「リスペクタビリティ」概念を補助線に	竹内 理欧
基盤研究(C)	通学制大学と通信制大学の比較を通じた高等教育の役割とその教育手段の明確化	田口 真奈
基盤研究(C)	明治期中学校形成史の再検討ー「辺境」の視点・鳥瞰的視角からー	田中 智子
基盤研究(C)	児童相談所におけるネグレクト判定の論理に関する社会学的研究	藤間 公太
基盤研究(C)	東アジアにおける高等教育システムの構造変容に関する比較研究	南部 広孝
基盤研究(C)	痛みのさなかにあるアメリカ哲学：セラピーとしての教育の国際的・超学際的対話研究	齋藤 直子
国際共同研究強化(B)	いかにして国際社会で使える英語を身につけるか：スピーキング力と意欲の向上を端緒に	Manalo Emmanuel
国際共同研究強化(海外)	心の動きを制御する心の動きを探る国際共同研究：社会構成主義的心理科学アプローチ	齊藤 智
挑戦的探究(萌芽)	教育実践の質的研究を通じた日本型大学教育の探求	佐藤 万知
挑戦的探究(萌芽)	科学的探究学習における思考力・自己調整学習力の評価システムの開発・効果検証・実践	福田 麻莉
挑戦的探究(萌芽)	発達の多様性と障壁に関する因果モデルの創出	明地 洋典
若手研究	乳児期の感覚過敏と階層変分ベイズ推定法を用いた事象関連電位の関連性	神谷 千織
若手研究	個々の学習内容の定着度を推定する：記憶理論に基づく方法論の提案と検証	西山 慧
若手研究	湾岸アラブ諸国における教育改革の構造的分析ー多様なアクターによる関与と調整	中島 悠介
若手研究	学士課程段階の高等職業教育の社会的受容状況に関する実証的研究ー中国を事例にしてー	張 潔麗
若手研究	親子相互作用における脳神経系ー自律神経系統合から探る乳児期のアロスタシス制御機構	田中 友香理
若手研究	自閉スペクトラム症特性をもつ理系学生の創造性発揮の要因に関する統合モデルの構築	田附 紘平
若手研究	童話『ピノキオ』をめぐる差別図書問題と図書館の対応に関する総合的研究	福井 佑介
若手研究	中学生における創造性の発達を促す諸要因の縦断的研究	澤田 和輝
研究活動スタート支援	乳幼児期の睡眠ー覚醒リズムの発達とその個人差に関わる神経生理学的要因の検討	松永 倫子
研究活動スタート支援	「畏敬の念」を生起する芸術鑑賞プロセスの解明	澤田 和輝

人事異動（2025.11.1～2026.5.1）

2025（令和7）年11月1日

技術補佐員（教育・人間科学）

採用

2026（令和8）年4月1日

南部 広孝 教授 研究科長・学部長（任期2026.4.1-2028.3.31）

西岡 加名恵 教授 副研究科長（任期2026.4.1-2028.3.31）

2025（令和7）年11月15日

教務補佐員（教育・人間科学）

退職

田中 智子 教授 副研究科長（任期2026.4.1-2028.3.31）

西岡 加名恵 教授 現代教育基礎学系長（任期2026.4.1-2027.3.31）

西 見奈子 教授 教育基心理学系長（任期2026.4.1-2027.3.31）

2025（令和7）年12月1日

技術補佐員（教育・人間科学）

採用

福岡 良明 教授 相関システム論系長（任期2026.4.1-2027.3.31）

田口 真奈 教授 教育実践コラボレーション・センター長（任期2026.4.1-2027.3.31）

齊藤 智 教授 グローバル教育展開オフィス長（任期2026.4.1-2027.3.31）

2025（令和7）年12月15日

派遣職員（教務掛）

採用

石井 英真 教授（教育・人間科学） 昇任

西 見奈子 教授（臨床心理学） 昇任

開沼 太郎 教授（教育社会学） 昇任

2025（令和7）年12月31日

中村 敦朝 主任（教務掛）

退職

田口 真奈 教授（高等教育学） 昇任

バク ジュナ 准教授（教育認知心理学） 昇任

岩淵 和祥 講師（グローバル教育展開オフィス） 採用

2026（令和8）年3月31日

松下 佳代 教授（高等教育学）

定年退職

倪 楠 特定助教（教育認知心理学） 採用

坂田 英里奈 特定助教（臨床心理学） 採用

松永 倫子 特定講師（教育・人間科学）

任期満了

多田 伸哉 教務掛長兼事務長補佐（教務掛）
（桂地区（工学研究科）教務課課長補佐（学部担当））より配置換え

澤田 和輝 特定助教（教育認知心理学）

任期満了

支援職員（附属臨床教育実践研究センター） 採用

清重 英矩 特定助教（臨床心理学）

任期満了

松下 佳代 研究員（教育・人間科学） 採用

國見 和敬 教務掛長兼事務長補佐（教務掛）

北部構内教務・図書課長、フィールド科学教育研究センター事務長に配置換え・昇任

技術補佐員（教育・人間科学） 採用

栗村 亜寿香 研究員（教育社会学）

任期満了

派遣職員（総務掛） 採用

事務補佐員（図書掛）

任期満了

派遣職員（グローバル教育展開オフィス） 採用

事務補佐員（附属臨床教育実践研究センター）

任期満了

事務補佐員（グローバル教育展開オフィス）

任期満了

新任教員・事務職員紹介



岩渕 和祥 講師

所属：グローバル教育展開オフィス

専門：比較教育学

教育プログラムの移転がもたらす変化、その要因・帰結、またそれらの二国間比較に興味を持っています。喫茶店通いが趣味です。何卒よろしくお願い申し上げます。



坂田 英里奈 特定助教

所属：臨床心理学講座

専門：臨床心理学

体験の意味づけと語りを中心的な研究テーマとしています。これまでお世話になった研究科のために尽力いたします。どうぞよろしくお願いいたします。

倪 楠 特定助教

所属：教育認知心理学講座

専門：認知・実験心理学

記憶のメカニズムや認知機能の可塑性について研究を進めております。お世話になってきた本研究科に貢献できるよう尽力いたします。よろしくお願いいたします。

多田 伸哉 事務長補佐兼教務掛長

事務長補佐兼教務掛長として赴任いたしました。
1日でも早く業務に慣れて皆様のお力になれるよう頑張りますので、どうぞよろしくお願い致します。

教育学研究科・教育学部基金

ご寄附いただきました方々への感謝の意を込め、ここにご芳名を掲載させていただきます。
(公開をご希望されない方については、掲載していません。)

村越 由美

戸村 翔一

山田 光一

高林 和明

大倉 寿之

長崎 徹眞

※50音順 ※2026年4月末現在

ー現場に活かせる「理論と実践の往還型の教育・研究」を推進し、 未来の教育の創造と、それを担う人材を育成します。ー

教育学研究科・教育学部は、1949(昭和24)年の創設以来、教育学研究の推進と研究者の養成に加え、全学の教職教育を担いながら、数多くの卓越した人材の輩出と、研究成果の現場への還元によって社会の要請に应运ってきました。

学校はもとより、地域、家庭、職場などあらゆる場面で「人間形成」の場であり、探究の対象です。本研究科・学部では、不登校・学習意欲不振生徒のための学校改善、過疎地域への地域振興提言などを行うほか、全国の教育現場の第一線で働く人々に研修の機会を提供してきました。こうした社会と連携した教育研究活動は、学生にとって、現場のリアルな問題に触れて自らの関心を見つけ、課題解決への手法を考察する実践の場ともなっています。今後も社会と連携した実践教育を行うため、安定した財政基盤として設立したのが教育学研究科・教育学部基金です。

2021(令和3)年度には、教育学研究科・教育学部基金のご支援によって、ホームページを大幅に刷新させていただきました。このリニューアルは、教育学環専攻1専攻への改組とその意図を明確に反映し、「理論と実践の往還型」の教育・研究を

より一層力強く推進するため、研究科・学部の活動の発信媒体としてのホームページの再構築を目的として行われました。2022(令和4)年度には、基金からの支出は行わない方法でコンテンツを充実させ、ホームページを洗練してまいりました。今後、引き続き、研究支援と教育支援を充実させるため、本基金を発展的に活用させていただきます。ご支援賜りますようお願い申し上げます。

基金の使途：

項 目	具 体 例
(1) 教育支援	・学生のための図書・教材等の購入 ・学生関係居居の整備・維持管理 ・障害学生等のための学習補助者の雇用 ・学生・院生の海外派遣 など
(2) 研究支援	・研究活動基盤整備の支援 ・研究・学術資料の整備 ・公開講座・講演会等の開催 など
(3) その他事業支援	・京都大学教育学研究科シリーズ本の出版補助 ・修了生・卒業生との連携活動 など

詳細については以下をご覧ください。

<http://www.kikin.kyoto-u.ac.jp/contribution/education/index.html>



編集後記

広報委員会のお仕事冥利で、研究科内の多彩なお顔ぶれにエッセイの執筆をお願いし、校正の段階から隅々まで味読する機会を得ました。同僚の先生方や事務職員の方、また学生さんが、心を込めて書かれた文章を一字一文字確認しながら読むことは、身近な方々と違う時空で出会い直すような、素敵な経験でした。年2回のニューズレターは、卒業生を含めた本研究科のコミュニティをつなぐ、大事なメディアです。——その実感を込めて、第52号をお届けします。(佐野真由子)

表紙によせて

教育学研究科における国際交流事業の一環として、ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン教育研究所(UCL Institute of Education)との国際合同授業が行われてきました。表紙はコロナ禍前に、京都大学の学生がロンドンを訪れて、英国の大学院ゼミを実体験したときの様子です(2018年12月8日-10日)。オンラインによる授業は効率性と世界のどこからでも参加できるというメリットがありますが、対面での国際合同授業もまた、外国語の息吹を体ごと感じながら、異なる他者との出会いを実体験できるという意味で、何ものにも代えがたい時を刻む経験となりました。(齋藤直子)



京都大学教育学研究科・
教育学部広報委員会

委員長 佐野 真由子(教育社会学講座) 委員 野口 寿一(臨床心理学講座)
委員 齋藤 直子(教育・人間科学講座)

事務担当

教育学研究科・教育学部総務掛

ホームページ <http://www.educ.kyoto-u.ac.jp>



ガイドドッグペーパー

当印刷物の用紙費用の一部は
関西盲導犬協会に寄付されています